
日本はきもの博物館収蔵資料紹介 ～19世紀の男性の靴と甲布～

日本はきもの博物館学芸員（非常勤） 市 田 京 子

はじめに

ここでは、日本はきもの博物館（広島県福山市）に所蔵されている欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料441点を順次紹介させていただいている。

博物館では「シュー・ファッションの歴史」をメインとしてきたため、女性用の靴が収集の中心となっている。男性用の靴はいわば付随品のような形で、靴の機能性をもたらす一方の旗頭であったろう軍靴をはじめとして、発達史的に捉えられる収集とはなっていない。それでも時代的な傾向を示しているといえる収集品があり、今回はそうした男性用の靴を取り上げた。

また、本誌160号で紹介したように、1830年代以降の靴には刺繍など手工芸ともいえる美しい装飾がみられたが、靴に仕立てられないまま残された甲布を紹介してみる。

なお、掲載する写真は全て日本はきもの博物館所蔵である。

1. ヒールの出現と男性の靴

「ハイヒールは最初男性用だったのか」という質問を受けることがあり、「ハイヒール」をどう捉えようか、と戸惑ったりする。17世紀の王侯貴族の肖像画の足元をみると、ヒールが描かれていることが多い。出現したばかりのヒールが広く受け入れられたことを示すといえよう。そのヒールは極

端に高いものではないが、ハイヒールとみることでもでき、赤く塗られているものが少なくない。18世紀にかけて、高級だった赤いモロッコ革をヒールに張るのが、男性の靴にみられるステイタス・シンボルだったという。

ルイ14世（在位1638-1715）の肖像には大きなロゼッタやリボンの飾りと赤いヒールが描かれているが、ヒールのある靴は胸をはった堂々たる姿勢を作ると喜ばれたという。その姿を揶揄した風俗画（写真1・注1）がある。これも流行だった白い鬘とヒールの靴を取ったら「ただのルイおじさん」というもので、履き手の意気込みも伝わる。

博物館の収集には、157号で紹介した18世紀初頭のミュール（写真2）がある。特徴は、先端がドーム型に立ち上がった四角な爪先、足に合わせるようにくぼませた内



写真1



写真2



写真4



写真3

底、革を張ったストレートなヒールで、これは浅靴にみられる特徴でもある。

写真3はジャック・ブーツと呼ばれる非常に頑丈なブーツである。黒革製で脚部は二枚重ねになっている。上端は膝の屈曲に合わせるように一枚革となり、取手用の紐がつく。革にステッチ刺繍をした拍車ガードには、バックル付きの2本のベルトと径3センチの小さな鉄製拍車が付く。拍車や拍車ガードは17世紀初期に出現している。底は薄い革片を7枚積み重ねてあり、ヒール部には2枚積み足してある。

1780～1820年頃、イギリスか。長32.8×幅14.3×全高60.0cm。

購入時「postilion boots」とあり「4頭立て馬車の第一列左馬の御者用ブーツ」と

なる。御者や騎手が足を保護するために用いたオーバースーツであるが、この時期、乗馬用を含めて、ブーツは男性用だった。

2. 19世紀の男性用の靴

18世紀まではファッション・リーダーだった貴族の男性も、肖像画をみると、靴は黒や白、茶色であり、フォーマルな靴は単色の革製になっている。それでも、17世紀のロゼッタやリボン、18世紀のバックルなど流行が取り入れられ、19世紀初頭のナポレオン1世の肖像にはヒールの消えたシンプルな靴が描かれている。

写真4は黒小山羊皮の靴で、黒のシルク・サテンのリボンテープを畳み重ねた飾りがある。甲の裏打ちは、前部シルク、後部が革であり、踵部の補強はない。2枚の革を重ねた底にも補強はなく、左右の違いもみられない。丸みのある爪先の形は19世紀初頭のものであろう。

フランスか。長24.9×幅6.9×高6.2cm。男性用としてはやや小さめである。

写真5も同様に黒革製であり、光沢のあるエナメル革にメタルビーズを並べたりリボン飾りが付く。裏打ちは、やはり、前部シルク、後部が革で、内底も白革が敷いてある。踵部にいわゆる「月型」のような芯が入る。左右の違いは僅かであるが、縫い目



写真5



写真7



写真6



写真8

からミシンが用いられているのが分かる。

この靴はコート・シューズであり、大礼服に用いられたようだ。

1870年頃、イギリスか。長27.2×幅7.9×高7.7cm。

写真6も黒革のコート・シューズである。劣化しているがエナメルのように、バラを浮かせた金色のバックル飾りが付く。左右の別がはっきりし、低い積革のヒールが付く。ラベル：N.TUCZEK 15B CLIFFORDST BOND ST LONDON.W。

1900年頃か、バラ飾りはイギリスのコート・シューズの特徴という。長28.2×幅9.2×全高8.4cm、ヒール高1.7cm。

フォーマル・シューズとは異なり、プライベートな場面では様々な装飾が楽しまれたことを示す靴が多い。

写真7はイギリスのアルバート公（1819-

1861）のものと伝わる靴である。ガーゼのような薄い織り地に刺された植物をモチーフにした刺繍は妻であるヴィクトリア女王（在位1839-1901）の手によるという記録がある。アルバート公御用達の靴メーカーに伝わったとされている。裏打ち・内底ともシルク・サテンで、底には綿が入れてある。この靴には手作りのシュー・キーパー（写真左足用参照）とラストが付いていた。

イギリス。長29.0×幅7.9×高6.4cm。

ラスト（写真8）は木製黒塗りの美しいものである。上端につけたシルバーの金具を引くことによって、中程で前後に分かれるようになっており、接合面は凹凸に組み合わせられている。7の靴もそうであるが、細長く優雅な形が理想の足を思わせるようである。左右の違いがあり、それぞれR、Lと彫り込まれている。

イギリス。長28.8×幅7.6×高8.0cm。

写真9はセパレート・タイプの靴で、甲



写真9



写真10

部は赤いシルク・サテンを幅広の縁にあてた青いベルベット、踵部は縁と同じ赤シルク・サテン、爪先にメタルとシルクの花柄刺繍がある。甲の裏打ちと内底には地模様を織り出したシルクと、こだわりを感じさせる。爪先は四角を呈し、底革には強いカーブで左右の違いがつけられている。

1840年頃、フランス。長26.9×幅8.0×高7.6cm。

写真10は非常に凝った装飾の靴である。甲は深紅のシルク地に、濃いベージュのシルクで植物をモチーフにした、立体的な細かいステッチのアップリケを施し、正面には、それに重ねて、多色のシルクで花の刺繍があり、履き口は金・銀糸のモールで縁取られている。そのうえ、甲の裏打ちはアイボリーのシルク・ダマスク、内底には毛足の長いアイボリーのベルベットが用いられている。

この靴は18世紀のヴェネチア総督に由来



写真11

するとして購入したが、はっきりと左右の別があり、踵部にもカウンター補強がある。19世紀も末期のものと思われる。Swann氏(注2)によると、アップリケなどの装飾がそうではないかといひ、シルク・ダマスクと毛足の長いベルベットも18世紀に多用された素材である。残された靴からはずして利用したと考えられるが、華やか過ぎる装飾にも関わらず典雅さも感じられる。

イタリア。長30.4×幅9.0×全高9.3cm、ヒール高1.0cm。

3. 手仕事のみえる甲布

19世紀の女性には、刺繍などの手仕事が大切なたしなみの一つでもあったようで、靴の甲布にもそれがうかがえる。ただ、上質のなめし革がモロッコから入っていたように、ヨーロッパ向けの織物や刺繍なども様々な地域から入っていたようである。靴に成形されないまま残された甲布を少し紹介する。

写真11はシリアで製作された綴織りのような織物である。光沢のあるアイボリー地にグリーンの茎と葉、赤とピンクのバラの蕾が織り出されている。グリーン縁線の外側を1cm程黄色地に織ってあるが、靴と



写真12

して必要な部分だけが織られている。糸はシルクで、四角な爪先のフラット・シューズのためのものである。

1840～50年頃。長27.3×幅30.0cm。

写真12は小豆色のフェルト地に白い花とイエロー・グリーンを基調にした葉を刺繍したもので、糸は毛糸であるが、繊細な刺繍である。甲の形は型押しプリントとみられる白い線で示され、同じような白線で「FORGET-ME-NOT & FERN（勿忘草とシダ）」の文字と商標のような孔雀の絵が入れてある。刺繍は手仕事であるが、商品として作られたものであろう。

19世紀中頃、イギリス。長33.3×幅48.5cm。

写真13は靴の形に切り出され、踵部も縫い合わされたものである。赤いフェルト地に鮮やかな黄色のシルク糸で、精緻で豪華な花柄が刺されており、縁には、同じ糸で刺繍した幅広の黒いベルベットが、チェーンステッチで縫い重ねてある。丸い爪先の女性用のものであるが、非常に派手やかな印象であり、民族衣装に合わせる伝統的な靴のものであろう。

19世紀末期頃、フランス、ブルターニュ地方。長25.2×幅20.5cm。

おわりに

19世紀の男性用の靴はバラエティに富んでいる。フォーマルな靴に伝統が色濃く



写真13

残っていたようであるし、履くことを楽しむ姿もみえるようである。

次回は19世紀中頃のヒールが再登場する時期の靴を紹介する。

注

- 1) R.B.ヨハンセン著、中田満雄訳『着装の歴史 人間と衣服の相関』、文化出版局、1977年、144ページ。
- 2) June Swann氏はイギリスのノーザンプトン・ミュージアムで長年靴の研究に携わられ、1994年博物館に来館。